

ありがとう 院内診療所

～地域医療を支えた憩いの場～

この地域で暮らしていく 私たちは応援団

平成12年に小出診療所に赴任し、大先輩である渡部先生が退職されるまでの4年間、かかりつけ医として学ばせていただいたことは大変光栄に思います。そして平成16年、渡部先生の志しを継ぎ、小出と院内、両診療所の所長としてスタートしましたが、当時は渡部先生への絶大な信頼と責任の重大さをひしひしと感じておりました。

それでも、なにより患者さんのためにと、職員にも大変難儀をかけたことが、地域医療の支えとなれるようひた走って参りました。

患者さんが通ってくださることが元気の証。そう思った時、今回の小出診療所への統合は実際のところ複雑な心境です。開設から70年以上が経ち、医療へのニーズが変化していくなかで、今後も安定的な診療体制を作っていくことは必要なことです。ですが、患者さんの有益性と地域性を考えたとき、必ずしも効率化が良いものと限らず逆に非効率であることが喜ばしいこともあります。

前述のとおり、患者さんが通ってくださることは健康のバロメーターです。そのためにも、市ではコミュニティバスのダイヤを改正するなど通院をサポート、そして私たちもより一層の診療体制の充実を図り医療の質の向上を目指して参ります。

生まれた子どもからお年寄りまで、自分の足で立って住み慣れた地域で暮らしていけるよう、私たちが目指しているのは患者さんの自立です。そのためにも、医療と介護、生活支援を包括的にケアしていくことができるように、私たちは患者さんに寄りそう応援団で在り続けたいと思います。



国民健康保険 小出・院内診療所
わだ ともこ
所長 和田 智子 さん

平成12年から16年まで主に小出診療所の所長を務め、渡部先生が退職された後に小出・院内両診療所の所長となる。4月から引き続き小出診療所の所長として地域医療を支えていきます。

かし、今ではこれらも昔話になり、現在の安全な時代になりました。私は平成16年に退職し、51年という半世紀以上にわたり地域医療に携わらせていただきましたが、仁賀保町を離れてすでに16年が経ちました。人口減少に苦悩する今の地方自治体、そしてにかほ市のことは知り得ませんので、このたびの院内診療所の小出診療所への統合にコメントする立場ではありませんが、熟慮の末の決定であったと思われまます。

地 域医療の基本は、かかりつけ医の存在無くしてはあり得ません。今の医学教育は専門医育成の様相を呈し、学生もそれを希望しているように思われます。そして、専門医が田舎に赴任してきたり、地元に戻ってきたり、医療を守る行政の責務であるのではないかと思われまます。このたびの特集に寄せて、多くの方々との出会いと喜怒哀楽を共にした職員の皆さんのことが懐か

しく思い出され感慨無量であります。私の診療を受けた多くの方々には、既に鬼籍に入っておられるでしょう。あらためてご冥福をお祈りいたしまして、この駄文を終わらせていただきます。さようなら院内診療所
ありがとう院内診療所
最後まで頑張ってくれた和田先生と職員の皆さんに感謝し、今後の活躍をお祈り申し上げます。

半世紀以上にわたり 時代の移ろいと共に

昭

和25年に開設した院内診療所。2年後の昭和27年、私は小出診療所に赴任しました。そして昭和38年、当時の医師が病氣退職され、小出・院内の2診療所の勤務が命じられました。

また、組合病院が国・県の要請を受け釜ヶ台に僻地診療所を設置していましたが、交通手段や要員確保が困難だったことから地元に移譲となり、私が月2回隔週の木曜日に診療しておりました。昭和25年建設の建物も2度の地震と老朽化で、現在の場所に移転しています。私がこの建物の設計段階で力点を待合室に置いたのは、利用者の方々の憩いの場にもなってもらいたかったためです。（今後の在り方に期待しております）

昭和20年代から30年代にかけては、小出・院内地区には帝国石油が、平沢地区には昭和石油があり、戦後のベビーブームも相まって町も学校も人々や児童で溢れ、診療所も多くの患者で多忙を極めておりましたが、とても充実した日々でした。やがて、資源枯渇で帝国石油と昭和石油が撤退しましたが、TDKが町内各地に事業所を設け、関連会社も多く進出し、さらには農業の機械化も進み主婦もパー

トで働きだしました。

当

時の国民死因の1位は結核、2位は法定伝染病を含む感染症でありましたが、これらはまもなく抗生物質の進歩で、治療とコントロールが可能となりました。代わって脳血管障害や心疾患、癌など食生活の変化により、いわゆる生活習慣病の時代に突入り、行政が中心の各種集団検診が始まっていきます。

また、乳児への予防接種も集団で行われ、我々も学校健診や結核、成人病検診など、行政のフォローを受けながら一体となつての地域医療が始まりました。そのため、検診結果への対応に自らのスキルアップが必要となり、私は組合病

院で胃内視鏡検査の特訓を受けたことが今でも忘れられません。しかし、その経験は私の外来診療に極めて役立ちました。胃癌の早期発見に繋がりが感謝されると嬉しいものでした。

一

方、地域医療の原点は救急医療への対応であります。救急車に関する法令の整備は昭和38年頃、救急救命士の配備は20年程前、仁賀保地区消防組合に救急車が配備されたのはその後であつたと思います。それまでは私たちが救急の役割を担っていたのですが、四六時中要請があり、この対応が肉体的にもきついもので、未舗装の道路や冬場の除雪なき時代の夜間は命がけでした。し



平成9年、笑顔で診察する渡部先生



昭和63年、仁賀保公民館で行ったツベルクリン反応検査の風景



昭和58年、院内診療所での診察風景

国民健康保険 小出・院内診療所
わたなべ つよし
前所長 渡部 侃 さん

秋田市在住/92歳。昭和27年から平成16年までの51年間、小出小学校の校医や小出・院内診療所のかかりつけ医として、半世紀以上にわたり、小出・院内を始めとした地域医療を支える。このたび、院内診療所が小出診療所に統合するにあたり、本特集に懐かしい思い出などを寄せいただきました。

写真は以前の院内診療所

